

# 不断念仏と『往生要集』

伊藤 茂 樹

日本における浄土教信仰の定着は、九世紀中頃におこった不断念仏によるところが大きい。不断念仏の浸透は、それまでになかった新奇な仏教が日本に根付いたわけではなく、奈良時代からみえた阿弥陀信仰、その多くは阿弥陀悔過に近似するかたちで日本に定着していった。不断念仏は、法照流念仏である五会念仏にその実態があるが、法照流念仏の移入は教理的な側面より、特異な音声による法式の導入に眼目があった。<sup>(1)</sup>

一方で、寛和元年（九八五）に撰述された『往生要集』は当該期における浄土信仰を包摂し、浄土教理論として道俗貴賤に受容され、以後の浄土教の指針となり多大な影響をあたえた。不断念仏の発展と『往生要集』成立は、日本浄土教において重要な課題といえる。これらは、個別に進展していくわけではなく、『往生要集』は不断念仏の影響を取り入れている。称名念仏、また地獄・浄土の觀念の浸透。これらは、『往生要集』に始まるわけではなく、不断念仏をはじめとする

当該期の浄土教信仰をふまえた上で生まれてきた。本稿ではこれらの課題に取り組んでいきたい。

## 一 不断念仏の興隆と仏名会

不断念仏は、貞観七年（八六四）に叡山東塔常行堂において円仁の遺志を汲んだ相応が始めたことを嚆矢とするが、以後、園城寺、無動寺、元慶寺、叡山西塔といった寺院でも始められた。これらの寺院での浸透の段階は、いまだ個人の往生といった概念は稀薄なものであり、特定の階層を除いて浄土教が浸透しておらず、常行三昧僧により、鎮護国家や自利における修善といった側面が強いものであった。

不断念仏が始まる頃、神泉苑では御霊会が行われ、宮中を中心として仏名会が始められた。宮中において仏名会が創始されたのは、承和五年（八三八）であり、以後恒例化を果たし、諸国でも仏名会に行われることになる。一方で、奈良時代より続く諸尊悔過会は減少を辿り、天安二年（八五八）以

降、仏の名を唱え懺悔する仏名会が盛行を迎えることとなる。<sup>(2)</sup>このような仏名会の盛行が、不断念仏の発展と時期的に重なっていることは注目される。

不断念仏は、その修法の形態が「昼は法華經を読み或は講じ、夜は阿弥陀仏を念ずる又は懺法を行う」というように、承和年間以降に定着をみた、読經悔過型法要と合致することから、<sup>(3)</sup>本質としては奈良時代より続く悔過会との近似性より定着している。蕨田香融氏は、浄土教の発生は、天台の密教化より派生したことを指摘されたが、不断念仏が定着する基盤は、雑密の修法である悔過会と同じ土壌の中で浸透してきた。<sup>(4)</sup>このことは、仏名会と同じであり、仏名会と不断念仏が発展していく土壌は、奈良時代より続く悔過会を基盤としている。仏名会と不断念仏の関係について興味深いのは相應の活動である。不断念仏を創始した相應は、不断念仏(五会念仏)を日本に移入した円仁の弟子であるが、鎌倉時代の琳阿本『法然上人伝』には「相應和尚念仏をひろめし」(『法然上人伝全集』法然上人伝全集刊行会、昭和四〇年、五五六頁)として念仏を広めた存在として認知されていた。一方で、相應の伝記である『天台南山無動寺建立和尚伝』には、

又書写三千仏名經一部是建立草庵独企修行之時始從二十二月一日迄三三日日夜為一切衆生滅罪生善薦福修仏名懺悔每三年無闕一夜必尽三卷。導師每唱一仏名和尚礼拝必三度。算

其成数九千礼也。縦得鳥獲氣力此非凡夫之所堪矣。爰知聖人所作在言談之外今年書写仏名經為允此用也。

(『群書類從』五、五五一頁)

三千仏名經による仏名会が定着する延喜一八年(九一八)以前に、三千仏名会をみずから行っていたことが記されている。不断念仏の創始者といえる相應が、三千仏名会を始めたことは、双方の関連からみても興味深い。相應が密教的修験に長けた僧であった事実は、蕨田氏の指摘にみる天台の密教化から浄土教が派生したという指摘から<sup>(5)</sup>考えても理解できるものである。すなわち、不断念仏と仏名会は、天台の密教化、または悔過会の盛行という基盤の中から展開をみたのである。

## 二 地獄思想の浸透

不断念仏の発展が、日本に浄土教を浸透させる役割を果たしたことはいうまでもないが、同時代に盛んであった仏名会は、浄土教において影響をあたえた側面がみられる。一つは称名念仏であり、仏名会の修法の形態が仏名を唱え懺悔するというあり方からも直接的な影響が窺える。<sup>(6)</sup>さらには、地獄思想があげられるであろう。和歌森太郎氏は日本社会に地獄思想が定着するについて、『往生要集』に先立ち仏名会が大きな役割を果たしたことを指摘された。<sup>(7)</sup>承和年間以降、宮中また諸国に盛行をみる仏名会は、『十六卷仏名經』をその典

掬にもつ。『十六卷仏名経』は、地獄での果報の恐怖を強調し、前世・現世・来世の仏名を礼誦し懺悔を行い、衆生の三世での罪障を避けることを趣旨とし、儀礼においては、「御仏名とて地獄絵の御屏風などとうでしつらふ」（『栄華物語』

日本古典文学大系七五、岩波書店、昭和三九年、一一六頁）というように、一万三千仏名の対に地獄変屏風が設置されて行われた。のちに一万三千仏名会は、玄鑑内供の上奏により三千仏名会に変更されるが、ここでは儀礼や法会の際の莊嚴には変化はなかった。仏名会の発展は、地獄観念の浸透を促すわけであるが、仏名会の墮地獄の観念は、讃岐国の仏名会（『晋家文草』二七九、日本古典文学大系七二、岩波書店、昭和四一年、三二八頁）に見えるように、「課税に逋逃」した者、「公私を欺詐」した者は地獄に墮すという懲罰的な意義を持ち民衆層へ浸透する。世俗の悪業や罪障により地獄へ墮すという懲罰的な地獄観は、墮地獄の回避のため罪障を消除する仏名会を際立たせる意義があるが、不断念仏においても滅罪という意義は重視され、双方の関係が示唆される。先に見たように、仏名会は承和以降に盛行するが、不断念仏も同時期より臨終行儀を中心として貴族層に広まりを見せる。良源は『九品往生義』を撰述し、空也、千観は民間に阿弥陀信仰を広め、浄土教信仰は在俗層への広まりを見せてくる。仏名会により広まった墮地獄の観念は、浄土教によって取り入れられ、地

獄・浄土の対比を生み出すことになる。そして、『往生要集』により結実されることになるのである。

### 三 『往生要集』撰述の背景

『往生要集』の撰述は二十五三昧講の指南の書としての性質<sup>(8)</sup>を持ち、僧俗を問わず多くの人に影響をあたえたことで知られる。しかし、源信の『往生要集』はけっして前代から浸透する浄土教の影響を等閑にした訳ではなかった。佐藤哲英氏は、千観が説く十大願は、第二願には還相摂化、弥勒受記が述べられるが、源信の『十大願』では、第七願、第八願にそれらが述べられ、ことに源信の第五願と千観の第一願の後半部分が、ほとんど本文が一致することを指摘された<sup>(9)</sup>。源信は浄土教の先師である千観に影響をうけているのである。

また源信は、良源の『極楽浄土九品往生義』から影響を受け、天慶以降に京洛の民衆に念仏を説き広めた空也にしても影響を受けたとされる。源信の浄土教は、それまでにない新奇な浄土教を説いたのではなく、当該期に広まる浄土信仰を摂取している。それは、不断念仏、また仏名会にしても同様であり、『往生要集』大文第六の別時念仏においては、『摩訶止観』常行三昧が引用されており、また『往生要集』本文中には、三千仏名会の典拠とされる『三千仏名経』も大文三、大文九の二箇所に引用されており、先にみた仏名会や不断念

仏の影響を見て取ることが出来る。

仏名会で浸透した地獄の観念は、『往生要集』で浄土と対比される。極楽往生と墮地獄は対極のものであるが、『往生要集』による極楽往生は觀察念仏を主としつつ、大文第九に「明<sup>ニサハ</sup>往生ノ諸行<sup>ヲ</sup>一者謂求<sup>ニル</sup>極樂<sup>ヲ</sup>者不<sup>レハ</sup>必專<sup>ニ</sup>念仏<sup>ヲ</sup>須<sup>下</sup>明<sup>ニ</sup>余行<sup>ヲ</sup>任<sup>中</sup>各樂欲<sup>上</sup>」(『恵心僧都全集』一、比叡山圖書刊行会、昭和二年、二二二頁)として諸行往生を本質とし、『往生要集』の墮地獄は、因果応報観にもとづく懲罰的な意義をもつのであるが、世俗の悪業と仏教的な作善行が鮮明に対比されている。

永延二年(九八八)に源信が制した『起請十二箇条』の第八条には、「但恐生前不<sup>レ</sup>修<sup>ニ</sup>善根<sup>一</sup>何何因<sup>ニカ</sup>身後免<sup>ニ</sup>三惡道<sup>一</sup>」(『恵心僧都全集』一、三四五頁)として、三惡趣を免れるために善根を修することが示されている。<sup>(10)</sup>ここには往生と墮地獄を生前の業因により対比する観念がみえ、墮地獄の恐怖から免れるために諸行作善に励む行者の姿がみえてくる。

地獄・浄土は、単なる対比として源信が創案したのでなく、民間に広まる地獄の観念を汲んだうえで浄土思想と対比された。『往生要集』は、同世代の浄土信仰、また世俗の倫理観を取り入れて製作されており、後の浄土教の規範となり在俗層に広く受容されるのである。

## まとめ

天台宗の不断念仏の展開期には、仏名会も宮中を中心として盛んに行われていた。地獄思想の浸透が仏名会の展開と併行しているように、『往生要集』につながる地獄・浄土の説示は、不断念仏・仏名会の発展と無縁のものではない。円仁の遺志を汲み不断念仏を始修した相応が、三千仏名会を推奨したことは相互の関係が無縁のものではないことを証する。源信の『往生要集』の成立は、同時代の念仏信仰を巧みに包摂し、浄土教理において墮地獄の観念を取り入れた。『浄土三部経』をもとにするものではなく、当該期に広まる仏教信仰から撰述されたのである。

源信の『往生要集』は、新たな念仏信仰を提示したのでなく、良源、空也、千観といった源信に先立つ先師の浄土教、また不断念仏、仏名会という法会の意義も受容した上で撰述されたのである。

- 1 拙稿「不断念仏の受容背景」(融通念仏宗開宗九百年記念大通上人三百回御遠忌奉修局編『融通念仏の信仰と教義の邂逅』法蔵館、平成二七年)。
- 2 佐藤道子『悔過会と芸能』(法蔵館、平成一四年)序論「懺悔と祈願の法会」。
- 3 山岸常人「悔過から修正・修二会へ——平安時代前期悔過会

の変容」(『南都仏教』五二、昭和五九年)。

4 蘭田香融「慶慈保胤とその周辺」(『顕真学苑論集』四八、昭和三一年)。

5 寺川眞知夫「相応和尚像の変貌」(新井栄蔵・後藤昭雄編『叡山をめぐる人びと』世界思想社、平成五年)、同「相応伝に記された阿尾奢法——その構造と病氣治療との関係——」(『佛教文学』三三、平成二一年)。

6 濱田隆「広隆寺『三千仏画』」(『国華』八八六、昭和四一年)。

7 和歌森太郎「仏名会の成立」(『修験道史研究』平凡社、昭和四七年、新訂版)。仏名会については、他に小林太市郎「仏名と沙門地獄草紙」(『小林太市郎著作集』五、淡交社、昭和四九年)、竹居明男「日本における佛名會の盛行」(『七寺古逸經典研究叢書』三、大東出版社、平成七年)を参照。

8 小原仁「勸学会と二十五三昧会」(日本名僧論集『源信』吉川弘文館、昭和五八年)。

9 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、昭和五三年)七五頁。

10 伊藤唯真「『往生要集』の一側面——悪趣拔済の展開のなかで——」(『往生要集研究』永田文昌堂、昭和六二年)。

〈キーワード〉 不断念仏、仏名会、『往生要集』、地獄

(知恩院浄土宗学研究所研究員)

新刊紹介

廣川 堯敏 著

鎌倉浄土教の研究

B五版・九四二頁・本体価格三三、〇〇〇円  
文化書院・二〇一四年六月